

長谷川成一著

『北奥羽の大名と民衆』

兼平 賢治

評者は、現在、非常勤講師として高専・大学の教壇に立っているが、本書を読み終えた後、特にこれから本格的に日本史を学ぶ、或いは研究を志す方々に是非読んでいただきたい一書が刊行されたことを喜び、学生に一読することを薦めている。内容は専門の研究書としての学問的レベルを保ちつつ、一般教養書としてのその読み易さから、本書が、日本史を愛好する多くの方々にも、広く愛読される一書となることを確信する。

著者である長谷川成一氏は、昭和五三年に弘前大学に着任され、爾来、近世史研究の第一線で活躍されとともに、地域への歴史研究の普及や後学の育成に尽力されており、現在の青森県は、研究者層も厚みを増し、東北で最も歴史研究の盛んな地域のひとつとなっている。そうした著者の活動の成果は、同県の近年における自治体史の充実ぶりにも結実しており、本書のなかにもその最新の成果が多く盛り込まれている。なかでも、自治体史編纂の過程で新たに発掘された史料を縦横に駆使し、新知見を提示されている論考は、本書を手にした方々に、歴史学という学問の魅力を十二分に感じさせてくれるだろう。

さて、本書に収録されている論稿（一二編）について述べると、その多くは、二〇〇〇年以降に発表された新しいものが基になっており、そ

れ以前に発表された論稿を基にしたものであっても、近年の研究動向に目配りされ、最新の成果が盛り込まれている。フィールドは、著者の勤務地の弘前市と郷里の秋田県由利本荘市を中心として描かれているが、その地域にとどまらない内容の広がりをもっており、時代は、豊臣政権期から江戸時代後期・幕末維新时期までを扱っているが、近世社会の出来事という枠を越えて、今日の問題に引き付けて考えさせられる事例も含まれている。また、本書を通読すると、著者の史料に厳格な研究姿勢も伝わってくる。以上は、本書の魅力の核ともいえよう。

では、以下、本書の構成を示した後、内容を紹介するなかで評者のコメントも加えていきたい。ただし、本書が「いわゆる専門の研究書ではなく、一般教養書としての性格を併せ持つ書物として執筆・編集」されていることから、学問的に堅苦しく論評することは避け（評者の力量不足もありますが）、日本史を愛好される方々には、その奥深さと魅力を再認識していただけるように、また、これから本格的に日本史を学ぶ、或いは研究を志す方々には、本書を大いに活用していただけるように、そのポイントを示すこととしたい。

本書の構成は以下のとおり（まえがき・あとがき・コラムを除く）。

I 北奥羽の大名・小名論 （第一〜四章）

II 北奥羽の社会と民衆 （第一〜四章）

III 北奥羽に関する各論―史料・鉱山― （第一〜四章）

次に、本書の内容について紹介しながら、あわせて評者のコメントも加えていこう。なお、本書で多くの割合を占めるI・IIに紙幅を費やした点をあらかじめ断っておく。

まず、I「北奥羽の大名・小名論」について。その概要を示すと、第一章「奥羽仕置と奥羽大名」、第二章「豊臣政権と出羽国の小領主」、第三章「文禄二年五月「誓紙一卷」と奥羽大名」では、奥羽の領主層が、奥羽仕置と文禄・慶長の役での肥前名護屋への出陣、伏見城の普請役の履行をとおして、統一政権によって新たに打ち立てられた支配秩序のなかに組み込まれていくその過程を、数多くの史料から丹念に再現する。

また同時に、「京儀」による支配を嫌う「奥羽民衆の草の根の抵抗」をする姿と、それとは対照に、これまでの奥羽の武家社会を律してきたものが通用しない新たな支配秩序のもとでの「日本之つき合」に、戦々恐々としながらも、必死に適合しようとする領主層の姿を、当時の文書の文言を引用しながら巧みに描く。読者には、奥羽の民衆と領主層が体感したその緊張感が、ひしひしと伝わってくることだろう。第四章「近世奥羽大名家の自己認識―北奥と南奥の比較から―」では、北奥の弘前藩津軽氏（外様大名）と南奥の会津藩保科氏（家門大名）の自己認識の形成過程とその背景を探り、両者を比較検討する。自己認識を比較検討する手法は、今後に引き継ぎたい。また、両大名を含む奥羽諸大名の自己認識にも言及するが、その際、アイヌの問題を導入している点は著者らしい視点で、論考に広がりを与えている。

では、各章の内容について、少し詳しく言及しよう。第一章では、奥羽仕置をめぐる最新の研究成果にもつきながら、親しみ易い文章でその全体像が描かれており、次章以降を読み進めていく上での理解を助けてくれよう。

第二章では、豊臣政権によって打ち立てられた新たな支配秩序のなか

に組み込まれ、さらに、関ヶ原合戦を経るなかで、懸命に生き残ろうとする奥羽の領主層の動向を、出羽の小領主である由利衆をとおして描かれており、これが全く筆者独自の視点であるが、本章で描かれる由利衆の姿からは、中世から近世への移行期を懸命に生き抜き、或いはそのなかばで没落していった、全国各地の小領主たちの姿をも重ねることが出来る。そうした点で、関ヶ原合戦後の由利衆の解体は、「由利の中世の終焉」であるとともに、全国が新たな時代を迎えたことを象徴する出来事であったともいえよう。

第三章では、肥前名護屋城で一斉に在陣の諸大名・諸将が花押を据えた「誓紙一卷」の歴史的意義を、その文面にある「明使節に対する悪口を禁止」させて、不測の事態を未然に防ぎ講和交渉の円滑化を図るためとするだけではなく、士気の低下・軍紀の弛緩がみられた諸将に、花押を据え誓約させることによって綱紀の引き締めを図ることにあった、と指摘する。当時の状況を踏まえての見解で説得力があり、読者には、史料を基に独自の解釈から新知見を導き出すという、歴史学のもつ魅力を改めて感じさせてくれよう。文書を、文字情報以外のところから深く読み込む手法も、この論考から学びたい。

第四章では、奥羽の北と南の両端に位置した弘前藩津軽氏と会津藩保科氏両大名の自己認識が、藩領が位置する地域に強力で規定されて形成された点では同じだが、それゆえに、また、大名としての性格の差異（外様大名と家門大名）ゆえに、両者ともに独自の自己認識を形成し、幕藩体制下における独自の立場を獲得した、と指摘する。そして、戊辰戦争時の両藩の対処の在り方については、「両藩の政治姿勢は両極のよ

うに見えるが、それらはともに各々の地域で培った自己認識に規定された行動であった」とする。首肯されよう。

ただ、「東北諸藩」というひとつのまとまり（緩やかな共通点）に興味をもつ評者の関心として、一度は奥羽列藩同盟として奥羽諸藩がまとまった事実と、そのために仙台藩が「その地理的・歴史的背景から東方の大藩として、奥州・奥羽の管領あるいは征夷大將軍として軍事指揮権を有する職掌の後継者という自認識」（難波信雄「大藩の選択―仙台藩の明治維新―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第三七号、二〇〇五年、三五頁）から結集の核となり、奥羽諸藩もそうした立場を容認していた観がある点にも注目したい。古代以来の国郡制の枠組みによる結集と、仙台藩伊達氏の近世において封印されてきた中世に起源をもつ自己認識の開放は、天皇権威が浮上する幕末維新时期という時代背景にも求められようが、奥羽の大名の「奥羽」認識や仙台藩伊達氏に対する認識といったところを探るのも、戊辰戦争時の諸藩の対処の在り方を考える上で論点のひとつとなりそうだが、いかがであろうか。

次に、Ⅱ「北奥羽の社会と民衆」について。その概要を示すと、第一章「慶長・元和期における出羽国の社会状況―山落・盗賊・悪党の横行と取締り―」、第二章「溜池をめぐる近世都市と民衆」、第三章「後期弘前藩政と民衆」、第四章「後期出羽国由利郡の都市民衆―町場の生活と祭礼―」ともに、主眼を奥羽の領主層に据えたⅠとは異なり、北奥羽に生きた民衆の姿を中心に、藩権力との関わりにも触れて描いた論稿を収めている。時代は江戸時代全体を網羅し、対象とする地域も描かれる人々も多彩で、興味に富む内容である。

第一章では、慶長一四年に出羽国由利郡笹子で越後国「金鑿衆」が大量に殺害された事件に着目し、この一件が、銀の産出に沸くなか、関ヶ原合戦で敗れた諸国の浪人やあぶれ者などが銀山を往来する堀子をねらって入り込み、治安や社会秩序が不安定だった当時の出羽国の状況を如実に反映する事件であったと指摘する。そして、大名の統治支配権力が強力になるなか、大量殺人も辞さない行動をとる「山落」・「盗賊」たちが史料から姿を消していったところに、時代の転換を読み取る。

第二章では、弘前城下近郊の南溜池を取り上げ、南溜池が、①藩主や民衆の「景勝の地・憩いの地」であるとともに、②殺生が禁じられ雨乞いの祈祷が行われる「宗教的な場」、それとは対照に、③塵芥投棄や投身自殺の場でもあったとし、特に③としての南溜池は、当時、北奥羽地方が、気候の寒冷化と慢性的な不作・凶作によって農村荒廃が進行し、都市へ農民が大量流入して都市問題が発生していた状況を象徴している」と指摘する。

第三章では、近世後期、大地震や大火災、大飢饉に見舞われ、混乱する弘前藩の状況と、そうしたなかでも、たくましく、そして、したたかに生きる民衆と有力商人の姿を描き、第四章では、本荘藩の城下町本荘の都市民衆の生活実態の諸相や、生活を脅かす災害・飢饉とそれへの藩の対応などを描く。

Ⅱについて評者のコメントを加えると、第一・第二章は、Ⅰ第二章とともに、北奥羽の状況と同時に時代の転換をも描く素材の着眼点が著者ならではのおもしろさがあり、これから新たに独自の歴史像を構築していくこうとする方々には、特に参考となる。第二〜四章では、景観や都市

問題、最近頻発している洪水・地震など、タイムリーな素材が取り上げられている。特に第二章では、都市や経済が発展する一方で、地方が疲弊し、ゴミ問題などの都市問題が深刻化し、生活弱者の自殺が増加している今日の状況にも重なる部分で紹介されており、近世社会の事例という枠を越えて、身近な問題と引き付けて考えさせられるところが多い。「歴史から学ぶ」ということを再認識させられる好論で、読者の興味を引くことだろう。

最後に、Ⅲ「北奥羽に関する各論―史料・鉱山―」について。第一章「盛岡藩五代藩主南部行信の死去をめぐる文書と記録」では、江戸時代における情報収集活動の困難さとそれにもなう緊張を史料から読み取り、第二章「弘前藩四代藩主津軽信政の花押と印判」では、弘前藩主津軽信政の花押と印判の変化から信政の人柄や政治的立場の変化を読み解く。これから本格的に史料と格闘する方々には、Ⅰ第三章とともに、文字以外からも情報を引き出し、新たな論点をみつけるおもしろさを感じ取ってほしい。評者の古文書字の講義でも、文書の折り畳み方を体験させたり、書札礼の違いなどに言及したりすると、文字の解説に四苦八苦する学生も、古文書の魅力に目を輝かせる。第三章「近世初期津軽領の鉱山開発構想」と第四章「泉屋又三郎と陸奥国尾太鉱山」は、近年、著者が精力的に研究を進めている鉱山研究の成果の一端である。著者による弘前藩の鉱山研究の蓄積が、国内有数の鉱山を抱える北奥羽の隣藩である盛岡・秋田両藩の鉱山研究を牽引することを期待したい。

以上、評者の思いのままに述べてきたが、本書の魅力、活用していただきたいポイントとしてここで紹介したところは、評者の力量不足と紙

幅の関係から、ほんの一部にしかならず、まだまだ読み込むことに新たな発見がある。この紹介を手がかりに、読者一人ひとりがさらに本書の魅力を引き出し、長く愛読していただければ幸いである。

(四六判、一五三頁、清文堂出版、二〇〇八年二月刊、一四〇〇円十税)

(かねひら・けんじ 東北学院大学・盛岡大学文学部非常勤講師)